
旅戦記

紅翼龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅戦記

【Nコード】

N8737B

【作者名】

紅翼龍

【あらすじ】

とある少年の、旅のお話。コメディ苦手な作者が、あえて書いてみたコメディ風味の、お話。おもしろいかどうかは補償しませんよ？

第0話（前書き）

やっぱ短っ！と叫んでしまいます。

第0話

「くそっ……………」

小さな呻き声が上がりました。

それは、傷つき倒れた少年のものでした。

痛む体を引き摺りながら、ゆっくりゆっくり前方へと進める時に出した声です。

少年は目の前にいる、手が届きそうで届かない男を恨めしそうに睨み、そして言いました。

「山田さん、少しは手伝ってよ。あんな量の敵なんか倒せるわけないじゃん」

山田さんと呼ばれた男は、ちらりと少年を見ました。

「あんな程度の連中を倒せないのかお前は」

そう言ってふつと馬鹿にしたように笑いました。

「たかだかゴブリン十匹。その程度だぞ。と言うか話し掛けるな。私は今読書中なんだ」

「いや、ほんとにうざいよアンタ」

少年はそう言つと、山田さんに会った時の事を思い出しました。そういえば、最初からこんなやつだったよな……と。

第1話（前書き）

第1話です。コメディてむずいです。ていうかこれコメディなのか
な（汗

第1話

少年はその時、草原を歩いていました。見渡すかぎりの草、草、草。まるで草天国です。

少年の名は、クロド・ランス。とても旅人らしい服装をした、銀髪の少年です。腰には、二本の短剣を差しています。

このクロドと言う少年は旅をしていました。何故かと言うと答えは単純です。世界を守る旅がしたい。そんなたった一人でできようハズもない、酔狂な考えからこの旅をしているのです。

しかし、この世の中そんな連中が多い事多い事、まるであの黒くて細くて素早くてしぶとい虫が如く大量発生しているのです。

まあそれも仕方無いことなのかも知れません。

その昔、この世の中はある十人の王によって統治されていたのですが、その内の一人が『魔王』へと堕ちてしまったのです。

魔王。すなわちそれは悪の統治者の事です。自分の領地と領民だけでは飽き足らなかった人間が陥る、病気に掛かってしまったのです。

魔王の力は強大でした。損害を厭わないからです。

彼は隣国へと攻め入りました。

彼は惜しみなく兵を使いました。

彼は足りなくなれば一般市民から徴収しました。

彼はそれでも足りなければ傭兵を雇いました。

そうしていく内に、やがて彼の周りには魔物がいるようになりました。その時にはもう、彼は人間ではあり得ませんでした。

このままでは、世界が彼に支配されて暗黒の世になってしまう。そう危惧した人達が、また彼を人間へと変えるために立ち上がりました。それが、クロド達旅人です。

「あー……にしても、どこから行こうかな……」

魔王によって世界各地が大変な事になっているため、魔王だけを

戻しても意味が無いのです。周りから少しずつ、元の世界に戻していくしか方法がありません。

「ニューデルは遠いしなあ……。とりあえずヨフカにでも行くか」
ニューデルは歩いて四日。ヨフカは二日かかる場所にありました。その二つは町の名前で、魔に汚染されている場所でした。時間にして半分ほどにある方を選ぶのは当然の事でしょう。

実は移動に半日も要しない所にもう一つあるのですが、クロドはその町から来たのでそこは除外しました。というよりも彼はその町から旅を始めたのです。除外するのは当然の事と言えました。

さて、ヨフカに向かって歩き始めたクロドは、初っぱなからライオンのような驚のような……。つまりはグリフォンという魔物に遭ってしまいました。戦うことはできません。レベル1の状態で二つ目のダンジョンあたりのボスに挑むようなものだからです。

「ちよっ……。！ 待って！ 死ぬ！」

クロドは逃げました。

当たり前です。

しかし、グリフォンは彼を嘲笑うが如く前方に回り込んで来ました。腹が減っているのでしょう。眼光はしっかりとクロドをとらえています。嘴からは時折涎が滴れています。

「えーっと……。僕は死ぬわけにはいかなので見逃してくれませんか」

恐る恐るクロドは聞きます。グリフォンは知性が高いため、交渉すればなんとかなるかも知れないからです。

「グガアッ！」

思いっきり威嚇して来ました。逃がしてくれる気はなさそうです。「ダメかあ……。じゃあ食糧を渡すから……。ダメですよねしません」喋っている途中でまた威嚇され、クロドは仕方なく謝りました。どうやら、おとなしくグリフォンの腹に納まるしかなさそうです。

クロドは諦めたようにうなだれました。グリフォンが彼に襲い掛かります。

そして、鋭い嘴が頭の肉と骨を突き破ろうと迫った時でした。

「ってんな事できるかあ！」

クロドが叫び、嘴をすんでの所でしゃがんで躲し、短剣を抜いて首へ身体が伸びるバネを使いながら突き刺しました。そして横にずらすように短剣を引き抜きます。

すると赤い血液が傷口から勢いよく霧のように噴き出しました。

クロドの顔や手が返り血を浴びました。まるでペンキで塗りたくったように真っ赤になりました。

グリフォンは断末魔の叫び声を上げました。いくら強い生き物といっても、首を切り裂かれたのですから当然です。その巨体がぐらりと傾き、地面に横たわりました。時折ビクンと痙攣します。血液がじわりと地面に広がりました。

「はあ……はあ……」

クロドは血を袖で拭きました。それで取れるわけではありませんが、いささかマシになります。

と、どこからともなく拍手が聞こえてきました。

「なかなかやるではないか。ピンチになったら助けてやろうと思ったんだが」

クロドがその方を見ると一人の男が立っていました。

「誰？ アンタ」

短剣の血を拭って直し、男に聞きます。

「私の名は山田正夫だ。五十二歳のスーパーヒーローだ」

「……は？」

一瞬クロドの思考が停止しました。聞き慣れない名という以前に何か変な言葉が聞こえたからです。

「えーっとヤマダ・マサオさん？ 今なんと？」

「山田正夫だ。スーパーヒーローをやっている。ちなみに彼女いない歴五十二年だ」

クロドはますますわけが分からなくなりました。スーパーヒーローってなんだ？ っていうかずっと独り身かよ？ それ以前に変人

か？ そんな疑問が次々と湧いてきます。

「つまりは正義の味方だ！ ふははははは！」

クロドの中で変人と決定しました。そういえば人相も服装もそんな感じです。

円形禿の長い黒髪。死にそうなほど青白い顔。赤マントに身体にぴたりと張りついていて赤い服に、黄色い靴。そして胸には『山』という奇妙なマーク。そして東の武器と思われる刀に似た物体。

完全に変態の格好です。「あ、そうそう。大切な事を忘れていた。私は…… ってうおおい！ 少年！ そんなに急いでどこへ行く！？ まだ私の話は終わってないぞ！」

クロドはスタスタとその場を離れます。

変人とは関わりたくなかったからです。

しかし、山田と名乗った男は回り込んできました。手強いですね。「どこに行くんだと言っている」

がっしりとクロドの肩を掴んで離しません。「あなたには関係無いですよ。どいてくれませんか」

手を外そうとしますがなかなか外れません。かなり力の強い変人のようです。

変人は言います。

「関係あるのだ」

「なんでですか」

クロドは嫌な予感がありました。

「私を旅の仲間に入れなさい。一人では寂しいのだよ」

そして予感的中しました。

「すいませんお断りします」

「何故だ」

「いや、だつて…… うぐつ！？」

変態なんかと一緒に行きたくない。そう言おうとしましたがそれはかないませんでした。

腹にきつい一撃を入れられ、気絶してしまったからです。

ぐつたりとしたクロドを山田さんは担ぎ上げ、そのまま歩きだしました。

第2話（前書き）

うーん短いな……難しいな……頑張ろうっと（；^_^）
こっちは他の作品より苦労しません。なぜ？
なぜか

第2話

「う……くっ」

クロドは目を覚ましました。腹がズキンズキンと傷みます。
「あれ？」

クロドが最初に見たのは何かおかしな世界でした。地面が頭の上
にあり、空が足の下にあります。しかも何故か身動きが取れません。
何やら、頭も重いです。血が溜まっているようですね。

「あ……なんで縛られてるんだ？」

クロドは少し考えます。一番新しい記憶は変人に会った事ですが、
それからの記憶がありません。この腹の痛みと関係あるのかな？
とクロドは考えます。

「お、起きたか。気分はどうだ？」

聞き覚えのある声がありました。身動きができないので、顔だけを
どうか声の方向に向けます。

顔を向けた先には記憶に新しい変人がいました。一気に記憶がフ
ラッシュバックします。腹を殴られた記憶も戻ってきました。

「……………降ろせ」

「その願いは聞けないな少年。私の願いを聞いてくれなければ」

山田さんは即答してきました。そして手に持っていたティーカッ
プを口に付けて中の液体を飲みました。この匂いはアールグレイで
しょうか？

「なんで俺がアンタなんかの願いを聞き入れなきゃなんないんだよ」
クロドがもつともな意見を言います。しかし山田さんはそれを無
視しました。「紅茶飲むか？ 美味いぞ」

「誰が飲むか！ っていうかそもそもこんな状態じゃ飲め熱ういッ
！？」

沸騰寸前の紅茶をぶっかけられました。もはや拷問ですね。

「で、私を仲間に入れてくれるのかな？ どっちだ少年」

山田さんはティーカップに紅茶を注ぎながら聞きます。

「あのな……俺にはクロド・ランスって言う名前が熱っちゃあいつ！」

飲みかけをぶっかけられました。量が少なかったので先ほどよりはまだましです。優しいですね。

「で、どっちだクロドよ」 名前は覚えてくれたようです。しかし、クロドは負けられません。こんな変人と一緒に旅などしたくないのです。

「だから……嫌だと言冷ッたくツて痛いッ!？」

氷水をぶっかけられました。溶けていない氷が顔に当たります。そろそろ風邪を引くかもしれません。

「私は了承してくれるまで続けるつもりだが」

山田さんが死刑宣告に近い言葉を発しました。

「……すいません仲間にして下さい。だから降ろして」
クロドはもう涙目でした。

第3話（前書き）

すべての作品含め、作者の都合で更新が遅れに遅れています。本当にすみません。久しぶりに書いた、第3話（いつものごとく短いです）よろしくお願いします。

第3話

「で、これからどこに行くのかね？」

ようやく降ろしてもらったクロドに山田さんは聞きました。

対して、クロドは紅茶と氷水、そして先の戦闘でついた血をタオルで拭いながら答えます。

「あなたには関係な……」

「死にたいのかなクロドよ」

山田さんはクロドが言い切る前に口を挟みました。その手にはいつの間にか刀と思われる物体が握られています。妙に赤いそれは、なんとも禍々しい妖気を放っています。

「答えなければこの『山田刀』が君の腕を一本無くすが」

「すいませんヨフカに向かっています。……って山田刀？」

よく分からない単語が飛び出しました。

「そうだ。山田刀だ」

山田さんはその山田刀なる物をしまいながら言います。

「私の故郷、山田星の技術により生み出された最高傑作だ。岩でも何でも切れるのでな。わざわざ大金はたいて買ってきたのだ」

「は？」

さらにわけの分からない事をこの変態は言い出しました。もう疑問なんてものではありません。

「先ほどは言い忘れたがな、私は君達から見たら宇宙人というものなのだよ。ところでヨフカとはどこにあるのだ？」

「えっと……ここから西に二日ほど行った所に」

山田さんの意味不明な言葉に混乱しながらも、クロドはとりあえず質問に答えます。もちろん、顔も困惑の表情で固まっています。

「二日！？ なぜそんなに遠いところに行かないとならないんだ！」

さっきしまったばかりの山田刀をもう抜いてクロドに突きつけます。

「いや、それはここから一番近いところにあるから」

クロドは泣きそうになりながら言いました。それを見ながら、山田さんは蔑むように舌打ちをします。

「やはり下等な文明しかない惑星だな……一つ一つの町が離れすぎだ」

山田さんは山田刀をしまつて、西に向かって歩き出しました。

「行くぞクロドよ」

なぜか高笑いをしながら山田さんはずんずん歩いていきます。クロドは、困惑と怒りと諦めがすべて混ざったような顔つきでそのあとを追いました。そして、同時にこんな事を思います。

『俺の平和な旅はどこへ行つたんだろう』

いきなり、明後日の方向へと飛んでいってしまったようですね。とにかくにも、山田さんとクロドの大冒険が今、始まりました。

第4話（前書き）

久しぶりです。短いですが頑張りました（；^_^A

第4話

さて、山田さんとクロドの二人が連れ立って旅を始めてから五時間後。

山田さんは陽気に腕を振りながら軽やかな足取りで、対してクロドは怒りと諦めの入り交じった陰鬱な足取りで一歩一歩順調に二人の旅は進んでいました。

もうすぐ夕方になります。ちなみに、二人は今とある森の近くを通りかかっているのですが実はこの森、出るんです。幽霊とかの類いではなく、猛獣が。夜になると活発化する彼らは相当に危険な存在です。クロドが始めて会った強敵、グリフィンなどとは一味違う闇に生きる獣達。狼や狼や狼です。

狼ばかりだからと言って馬鹿にはいけません。彼らは狡猾で残酷な種族なのです。グループで徒党を組んで獲物を追い詰め、弱った所を容赦なく襲うのです。

さらに彼らは縄張り意識が強く彼らの縄張りに入った者を容赦なく殺します。

そして今、山田さんとクロドの二人は彼らの縄張りを通り抜けようとしていました。まだ夜にはなっていないので大丈夫ですが、もし夜になってもそこにいた場合は大変な事になるでしょう。

と、急に山田さんが立ち止まりました。後ろを歩いていたクロドがその背中にぶつかり鼻を強打します。

「へぐゅっ……ッ!!」

クロドは鼻を押さえて悶絶しました。

「なん……で、止まるんですか」

「腹が減った」

「……は？」

そんな理由で俺は鼻を打ったのか!? そう涙目でクロドは山田さんを睨みます。

「ん？　なんだその目は。私が腹を空かせるのがそんなにダメなのか？　切り殺すぞ？」

「……いえ、なんでもありませんよ」

クロドは小さく舌打ちをして言いました。

「で、腹減ったってどうするんですか。言ってきますけど僕は自分の分しか持ってませんよ。一人旅のつもりだったので」

最後の方を強調してクロドは言います。が、時すでに遅しでした。

山田さんはいつの間にかクロドの荷物から全ての食料を取り出し食べ始めていたのです。

「ツてうおい！　アンタいつの間についていかそれは俺のだ！！」

「ん？　大丈夫だぞクロドよ。私は好き嫌いをしないようにしているのだ。苦手だからと言って残すような事はしない」

言いながら山田さんは驚異的な早さで四日分はあろうかという食料を自身の腹の内へと詰め込んでいきます。

「ふむ、これは美味しいな。なんと言う食べ物なのだね？」

「だから食うな！」

「知らないのかね？　まあいい、名前など知らなくても美味かったのだから身体に毒という事はないだろう。何はともあれ、ご馳走様だ」

山田さんは食べ終わるとゲップを一つして、服が汚れるのも気にせず一本の木の下に気怠そうに横になりました。そして、あー眠いと呟きます。

「って全部食ってる！？」

数十秒で食料を山田さんが消してしまいました。どうやら恐るべき胃袋を持つ方だったようです。必然的にクロドのご飯も消えてしまいました。

「アンタ鬼かつ！？」

「私はスーパーヒーローだが？」

「黙れッ!!」

クロドは怒鳴ったあとガクツと膝をつきました。

「あははははっ……もうグチャグチャだ……」

楽しい楽しい冒険を予想でもしていたのでしょうか？ もしそう

なら勘違いだったですね。

「私は少し寝る。起こすなよ」

山田さんは寝るようです。

く続くく

第4話（後書き）

次はいつだろ……

第5話

二時間後。山田さんが寝たまま、夕日が落ちようとしていた時間でした。

「俺の……俺の食料が……」

クロドはがつくりと膝をついていました。二時間前に山田さんが寝てからずっとこの状態です。うわごとのように言っている言葉もまったく変わりません。よく飽きませんね。

「俺の食料……」

「んあー？ もう食えん……むにやむにや」

「……………」

クロドは拳をいきなり地面に打ち付けました。ここ二時間で初めての違う行動です。その状態でふるふると身体が震えています。どうやら、山田さんの寝言が相当頭に來たようです。ゆっくり立ち上がりました。

「起きやがれこの円形脱毛野郎！！」

クロドはそう怒鳴ると山田さんを思いっきり蹴り上げました。ボグツという鈍い音が響きます。それと同時に山田さんの身体が悲鳴と共にくの字に折れ曲がり、一瞬滞空しました。ドサツと山田さんは落ちます。

「ぐっ……………！！ き、貴様何を」

山田さんは悶絶しながらクロドを睨み付けます。

「黙れッ！ てめえのせいで俺の飯が無くなっただろうが！ どうしてくれんだよ！」

もの凄い剣幕でクロドは山田さんの言葉をさえぎりました。よっぽど怒っているのかこめかみに青筋が立ち、背後には何やら怖い顔をしたおじさんが見えるようです。

さて、山田さんは恐怖しました。自分には「身に覚えのない事」なのですが、何故か下僕であるはずのクロドが主人である自分に本

気でキレているからです。

「ど、どうしたんだクロドよ」

「どうしたもこうしたもねえ!!」

「ひいつ!」

「いいかこの円形ハゲ。よく聞けよ?」

グリグリと踏みつけながらクロドは冷やかな目で言います。

「痛い痛い痛いッ! わ、私は円形ハゲじゃ」

ドゴスッ!

クロドが間髪入れずに山田さんに蹴りを入れました。山田さんが二メートル程吹っ飛びます。

「あ…う…ぐっ」

「てめえはこれから俺の下僕だ。いいな」

「なっ……ふざけるなよ。それは逆だろう。貴様が私のぐりゅぶあつ!!」

「何か言った?」

山田さんの頬を思いつきり殴って、クロドは笑顔で聞きます。

「うぐっ……いえ、何でもありませんっ」

「じゃあ、今から俺の食料取ってきてくれない? 鹿とかがいいね。そろそろ狼が動きだす頃だけど、まあ大丈夫でしょ」

クロドはにつこにこしながら鬼のような事を言います。

「あのー、なんで私が食べ物を取りに行かないと行けないのでしょうか」

「ん?」

「いや、その、行ってきますです、はい」

山田さんはガタガタ震えながら立ち上がります。そして、引きつった顔で聞きました。

「ところで、シカってなんですか? あと、オオカミって?」

はあ? という表情でクロドは山田さんを睨みました。

「あんた舐めてんの？ 一度死ぬ？」

「い、いや、本当に知らないんですよ！ だってほら、私は宇宙人だから」

「……………」

「嘘じゃないぞ！ ほら、この山田刀が証拠！」

そう言つて腰に吊っている刀を抜いてクロドに見せます。

「ただの刀だろ」

「違う……ほら！ 岩もこの通り斬れるし！」

ヒュツと近くにあった岩を斬り付けました。

バキンッ。

「……折れたけど？」

「なんっ！？ そんなはずは……。私の山田刀が……」

山田さんは折れた山田刀を見ながらあんぐりと口を開けました。

「ふん。まあいいや。鹿つてのは草食動物で、狼は肉食動物。さあ、早く行つてきて」

「え？ ちよつと！ そんだけか！？」

「行けつてんだよ。聞こえないのかな？」

どこからか銃を取り出してクロドは言いました。

「はい！ 行きます！ すぐに行きます行つてきます！」

山田さんは瞬間、飛び上がってから森の奥へと走つて行きました。「そうそう。それでいいの。…………さてと、行くか」 んーつ。と

伸びをすると、クロドは歩きだしました。そして一人嘆息します。

「やっと一人旅ができるな。まったく人騒がせなオヤジだ」

山田さんを置いて行くつもりなのでしょう。森に入つて行った山田さんをまったく気にせずにクロドは森を離れて行きます。残酷な少年ですね。食べ物の恨みは怖いとはこの事でしょうか。

まあ何はともあれ、山田さんとクロドは別々の道を行く事になり

そうです。

「ううむ。クロドの奴め。帰ったらみておけよ。私の恐ろしさを知らせてやる」

がさつ。

「ひいつ!?!? ご、ごめんなさい!」

山田さんは臆病なようです。

さあ、そろそろ夜になろうとしています。

第5話（後書き）

お久しぶりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8737b/>

旅戦記

2011年10月3日20時07分発行